

メガシティ・ジャカルタにおける「宗教と環境」についての調査に関する一考察

著者	木村 武史
雑誌名	哲学・思想論集
巻	39
ページ	152[35]-131[56]
発行年	2014-03-31
URL	http://doi.org/10.15068/00000562

メガシティ・ジャカルタにおける 「宗教と環境」についての調査に関する一考察

木村 武史

初めに

サステナビリティ研究の中で都市研究は重要な位置を占めている。最近では、途上国を中心に人口が集中、増加するメガシティが地球環境に与える負荷についての研究も増えて来ている。2008年には世界の総人口の半分以上が都市生活者となったとされ、第一次産業に従事する人口より消費する人口の方が多くなった。それに伴い地球環境への影響についても議論されており、都市・メガシティをいかに持続可能な都市へと作り変えて行くかは重要な課題となっている。

サステナビリティ研究が具体的な問題解決に向けた研究であるという特長から、工学、自然科学、社会科学の面からの研究が主導しているといえる。このような中で、宗教の立場から実践的に環境問題に取り組んでいる団体もあり、そのような宗教の環境活動の側面を取り上げる研究も増えて来ている。ところが、都市・メガシティという人工的空間を舞台として宗教と環境の問題を考える時、課題は一筋縄ではいかない。都市・メガシティは欲望と消費が蠢く空間であり、自然が少ない都市空間では、都市の自然環境という問題は主要な課題としては優先的ではない。また、政治・経済の中心地でもある都市・メガシティにおいては宗教にとっての優先課題は政治や社会問題であることが多々あり、自然環境の保全等は必ずしも優先的課題ではない。この問題は、インドネシア共和国の首都ジャカルタにおいて、総合地球環境学研究所「メガシティが地球環境に及ぼすインパクト—そのメカニズム解明と未来可能性に向けた都市圏モデルの提案」(プロジェクト・リーダー 村松伸教授)の価値観調査班に参加して行ってきた宗教と環境に関する調査の中で直面した課題である。

本論では、この問題をインドネシア共和国首都ジャカルタにおいて行った「メガシティと「宗教と環境」に関する調査を Autoethnography の過程と捉え、アンケート調査の結果を一部報告しながら、サステナビリティと「宗教と環境」の問題を論じてみたい¹。ここでいうサステナビリティという考えには多様な要素が含まれるが、例えば、Leslie Paul Thiele の次の定義も参考になる。

「サステナビリティとは倫理的ヴィジョンに仕える科学と結びついた適応の業である。それは、生態学上の健全さ、経済上の豊かさ、社会的エンパワーメント、そして文化的創造性をバランスよく追求することを通して、将来世代の健全な生活を犠牲にすることなく、現代世代の欲求をも満たす業である。(Sustainability is an adaptive art wedded to science in service to ethical vision. It entails satisfying current

needs without sacrificing future well-being through the balanced pursuit of ecological health, economic welfare, social empowerment, and cultural creativity.)」²

この定義の特徴は、科学は倫理的ヴィジョンに仕えるという風に明確に指摘している点である。従来、サステナビリティの議論が科学的な調査や経済上の政策などに偏っていたのに対して、倫理的ヴィジョンが上位に来ると明示しているところが重要であるといえる。

さて、このようにサステナビリティの問題をメガシティとの関連で取り上げようとするならば、宗教学の観点から注意をする問題がある。まず、第一に、「宗教」とは関係がないと思われる世俗的な問題である「サステナビリティ」や現代の世俗的都市のメガシティの問題を考察の対象とするということである。この視点の枠組みの中では「宗教」は既に規定されてしまっている。世俗的な近代都市の中における「宗教」という意味で。宗教学の研究対象が「宗教」であるとするならば、本論は必ずしも宗教学の論考という制約に留まらないことになる。しかしながら、本論では「世俗的な近代都市」も宗教学の対象として考察することを目的としている。つまり、「世俗的な近代都市」とその中の「宗教」をともに考察の対象とすることになる。

さて、メガシティ・ジャカルタにおける「宗教と環境」のこの調査は現地調査というものから自らの経験を通して徐々に現地の社会と文化を理解していく過程であるということを経験させてくれたものであった。解釈学の問題が文字化され、固定化されたテキストを対象とするのに対して、常に流動的で複雑なメガシティを舞台とした現地社会を理解の対象とする際の課題と過程を検討できるという意味で、理論的にも重要な点があると考えられる。同時にサステナビリティというテーマを通じて異文化社会を研究の対象とすることは研究者の社会的・倫理的責務を再考させるものであった。なぜならば、筆者の研究上の問いかけが当初の意図とは違うところで認識され、そして、新たな展開を生み出すこととなったからである。もう少し詳しく述べるならば、この調査を通して筆者は現地の人々にサステナビリティという未来倫理的次元を含んだ質問をしてきたが、同時にそれは自らがそのような責任倫理的次元を持って研究をしていると受け止められていることを示している。他者の社会に対して倫理的問いをするのは一体どのような立脚点に立つ時可能となるのか、倫理のグローバル化の観点からどのような位置づけがなされ得るのか³、また、持続可能性というグローバルで共有されるべき課題であるとしても、人文学は具体的な問題解決という課題の前で無力なままで良いのであろうか、という問いかけでもあることに気づいた⁴。実際、メガシティとしてのジャカルタの規模を前にして、「宗教と環境」というテーマで調査をして感じるのは、問題解決という観点からするならば、人文学的立場の自己の無力さである。その点を認めた上で考察を行いたい。

ジャカルタは東南アジア有数のメガシティであり、今日、最も経済発展が目覚ましい経済の中心の一つである。ジャカルタ都市圏の人口は2000万人を超え、なおかつ人口増加率も著しい若く活気のある都市である。そして、良く知られているが、インドネシアは世界最大のムスリム人口を擁する国であり、その人口は2億人以上である。

1. メガシティ・ジャカルタと「宗教と環境」の調査

さて、筆者の立場は宗教学であるので、必ずしも現地調査が求められるわけではないが、現地に行ってみて思うのは、過去のことを研究するにせよ、現地に行つて何らかの調査をすることは必要であるという当たり前のことである。特に、多くの島からなる島嶼国家であるインドネシアでは、各々の島で異なる文化・宗教が育まれてきており、現地調査から得られる知見は不可欠である。ジャワの宗教の研究に関しても数多くの研究がなされている。クリフォード・ギアツの『ジャワの宗教 (The Religion of Jawa)』(1960年)以降⁵、多くの研究がなされている領域であり、豊かな議論がなされている。ギアツはジャワの宗教は三つの理念的類型、つまりシンクレティックな傾向を持つアバンガン (abangan)、正統派イスラーム教徒であるサントリ (santri)、そして、旧王宮のヒンドゥー・ジャワ的伝統を保持するプリアイ (priyayi) からなり、それぞれのが農民層、商人階級、旧貴族層プラス新官僚層といった社会的基盤に相応すると論じた。ギアツの研究を更に展開したのが、日本国内では、1980年代に行つたフィールドワークを下敷きにした福島真人の『ジャワの宗教と社会：スハルト体制下インドネシアの民族誌的メモワール』(2002年)⁶、英国ではアンドリュー・ペイーティの『ジャワ宗教の諸相：人類学的説明』(1999年)⁷などがある。

インドネシアの思想やイスラームに焦点を当てて解説している著作も数多くある。目に付いたものだけ挙げてみると、ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』(1987年)⁸、土屋健治の『インドネシア思想の系譜』(1994年)⁹、タウフィック・アブドゥラル編、『インドネシアのイスラーム』(1985年)¹⁰、近年のインドネシアにおけるイスラーム覚醒を取り上げた倉沢愛子の『インドネシア イスラームの覚醒』(2006年)、中村光男のムハマディヤを取り上げた研究などがある¹¹。

これらの宗教に焦点を当てた研究とともに、本論のテーマであるメガシティや持続可能性といった問題を考えると、後者は特に環境学関係で数多くの研究がなされている。それらすべてをここで参照することはできないが、特徴的なのは自然環境が豊かな場所での研究が多く、都市に焦点を当てたものは多くないといえる。例えば、笹岡正俊の『資源保全の環境人類学：インドネシア山村の野生動物利用・管理の民族誌』(2012年)¹²、井上真の『コモンズの思想をもとめて—カリマンタンの森で考える』(2004年)¹³など数多くある。

これらは自然環境の多い地域に焦点が当てられるが、自然がほとんどないメガシティ・ジャカルタの研究は自ずとテーマも変わってくる。例えば、倉沢愛子の『ジャカルタ路地裏フィールドノート』(2001年)はジャカルタのカンボンに住みこんで、人々の生活に密着する中で隣組生活を描きだしている¹⁴。同様に、隣組・町内会 (RT・RW) を取り上げているのが、吉原直樹編著の『アジア・メガシティと地域コミュニティの動態—ジャカルタのRT/RWを中心として』(2005年)であり¹⁵、ジャカルタのカンボンの地域保健活動に目を向けているのが、斎藤綾美の『インドネシアの地域保健活動と「開発の時代」：カンボンの女性に関するフィールドワーク』(2009年)である¹⁶。ジャカルタを不動産開発の観点から取り上げているのが、新井健一郎の『首都をつくる：ジャカルタ創造の50年』(2012年)である¹⁷。メガシティ・ジャカルタを消費の舞台として描いたのが、倉沢愛子編著の『消費するインドネシア』(2013年)である¹⁸。

これら以外にも、民主化のプロセスとの関係でイスラームと市民社会というテーマを取り上げている研究も数多くある。例えば、Robert W. Hefner の *Civil Islam: Muslim and Democratization in Indonesia* (2000年) や¹⁹、民主化とともに生まれてきた反市民社会的な傾向を取り上げた Verena Beittinger-Lee の *(Un) Civil Society and Political Change in Indonesia: A contested arena* (2009年) などもある²⁰。

これらの本格的な実地調査による描写に比べると筆者の調査は不十分であるという誹りを逃れられないが²¹、少なくともジャカルタにおける「宗教と環境」というテーマに取り組むために現地に赴いて聞き取り調査をし、アンケートを調査をしたということは、筆者にとってジャカルタが「見知らぬ場所」から「親しみのある場所」へと変容する過程でもあった。これらの調査の結果の報告を提示する際には、調査の目的に従った結果を提示、分析することが必要だが、そのような限定された仕方では「見知らぬ場所」から「親しみのある場所」へと変わっていく過程で得られた様々な他の情報、知見を取り上げることはできない。当然のことであるが、この過程を経ることによって初めて「宗教と環境」に関して必要な質問項目についても考えられるようになったし、更に言えば、より深く関わるようになったといえる。それゆえ、実地調査の時間の不足を補うためともいえるが、筆者が対象であるジャカルタとそこにおける「宗教と環境」についていかに知見を求めたかという問題を取り上げることとする。それゆえ、本論は、エリスらが論じているように Autoethnography の側面に強調点を置いた考察となる²²。エリスらは Autoethnography の種類として以下の9種類を挙げている。ここで少しまとめてみることにしよう。

① Indigenous/native ethnographies (先住民的・原住民的民族学誌)

植民地化された、あるいは経済的に従属的な立場に置かれた人々から発せられ、研究における権力の問題を提議し、権力に対して疑義を唱え、(エキゾチックな) 他者を研究する(外部の) 研究者の権利と権威を問題化する。現地の人々は(白人・男性・異性愛・中上流・キリスト教・健常者である) 民族学者の援助をしていたが、今日では先住民的・原住民的民族学者は自らの個人的・文化的物語を構築するようになった。(強いられた) 従属的立場はもはや許されざるを得ない。

② Narrative ethnographies (物語的民族学誌)

物語的民族学誌とは、他者に関する民族学誌的記述と分析に民族学者自身の経験を織り込んだ物語形式で提示するテキストのことである。それはまた、語り手と研究される集団の成員との間の出会いと交流を部分的に取り入れた他者に関する民族学誌的研究であり、文化社会的交流の種類と過程の分析を伴う。

③ Reflexive, dyadic interview (反省的・対照的インタビュー)

インタビューそのものが持つ相互交渉的に生み出される意味と感情のダイナミックに焦点を当てている。参加者とその物語に焦点が当てられるが、同時に研究者の言葉、思想、感情も考慮される。つまり、研究を行う個人的動機、テーマについての知識、インタビューに対する感情的対応、インタビューの過程を通してインタビューをした人がどのように変わったかなどについても注意が向けられる。研究者の経験は主要な論点ではないが、研究者の個人的反省は、参加者について語られる物語に文脈と階層化を生み出す。

④ Reflexive ethnographies (反省的民族学誌)

反省的民族学誌は研究者が実地調査を行った結果どのように変化したかを記録する。民族学者の自伝により研究の開始から研究対象の文化集団の生活とともにある自らの生活を研究し、民族学誌的記憶を記し、「告白的物語」を構成する研究である。そこでは研究者が行っている研究の舞台裏にも焦点を当てることになる。

⑤ Layered accounts (多層的説明)

データ、抽象的分析、関係ある文献とともに著者の経験に焦点が当てられる。研究そのものが持つ過程の性質に注意を向ける。グラウンディッド・セオリーと同様に、いかに「データの収集と分析の過程が同時に行われたか」について説明し、既存の研究を「真実を計る尺度」としてではなく「問題と比較の資料」として扱う。だが、グラウンディッド・セオリーとは異なり、調査を行い、記述する「立ち現れる経験」へと読者を「誘う」ために、装飾語、反省、多次元の声、内省などを用いる。そこでは自我意識を「立ち現れる過程」と見なし、抽象的分析と同様に具体的で関心を引き付ける事例を取り上げる。

⑥ Interactive interviews (相互的インタビュー)

「感情的になってしまう非常に微妙なトピックについての人々の経験を深く、そして親身に理解」できるようにする方法である。相互的インタビューは、研究者と参加者が、特別なトピック（摂食障害など）について会話を通して問題点を明るみに出す研究方法である。相互的インタビューは通常複数回のインタビューを行う。旧来の見知らぬ人との一对一のインタビューとは異なり、お互いに知り合いの参加者と研究者の間で生じてくる関係の中で行われる。この研究では、インタビューという場でのやり取りを通じて何を学ぶことができるかという点とお互いに伝えあう物語に焦点が当てられる。

⑦ Community autoethnographies (共同体的自伝・民族学誌)

協働関係にある研究者の個人的経験を用いて、共同体がある特別な社会的・文化的事例に対してどのような反応をしたかを描き出す。それゆえ、共同体的自伝・民族学誌は「共同体・構築」を伴う研究実践を進めるだけではなく、「文化的・社会的介入」を可能とするような機会を生み出す。

⑧ Co-constructed narratives (共・構築的物語)

関係から生じる経験の意味、特に友人・家族、パートナーであることの曖昧さ、不安定さ、矛盾点などに人々がどのように共同体的に対処したかを記述する。共・構築的物語は人間関係を共に語る終わりのない歴史的な出来事と見なす。共に行う活動は共・構築研究を構造付けることになる。しばしば「エピファニー（神聖顕現）」を巡って語られるが²³、個々人が自らの経験を書き、他の人々は他の人が書いた事柄にいかにして共有し、反応したかを論ずる。

⑨ Personal narratives (個人的物語)

自らを現象として捉え、特に学問上の生活、調査、個人的生活に焦点を当てた特異な物語を語る。この種の自伝・民族学誌は、旧来の分析や先行研究との関係が示されないのので、従来の社会学者にとっては極めて問題と見なされる。個人的物語は、個人が研究対象の文化上の文脈とどのような相互交渉をし、他者を共同研究者としてどのような関係を築いたかを叙述し、そして、自らの人生を振り返り、自らをどのように理解し、自らの生活にどのように対処したか、そしてそこから何を学んだかを紹介し、読者を著者の世界に誘う。

エリスらによれば、Autoethnography には以上のような諸側面があることになる。同じく Autoethnography と呼んでも①の Indigenous/native ethnographies (先住民的・原住民族的民族学誌) と残りとは若干ジャンルが異なっていると思われる。①に関しては、植民地支配を受けた歴史のある人々、あるいは社会的抑圧・搾取を受けた歴史のある人々が自らの置かれた状況を踏まえて、自らの文化・歴史の記述をしようとする試みであると言える。筆者の立場が関係するのは、この①を除いた他の領域であるといえるが、その全てが関係してくるわけではない。

さて、本論では、これらのうちのどれか一つに沿って論じるのではなく、適宜、それらの諸次元を考慮した論述を進めることとする。ところで、筆者は、メガシティの持続可能性というテーマを「宗教と環境(自然)」の観点から、メガシティとしてのジャカルタの問題点を調べたという点を強調しておきたい。というのも、ここで取り上げる諸点には、通常の宗教学の観点からは出てこないような論点も数多く取り上げることになるからである。また、本論でこのような論述をするのは、メガシティと「宗教と環境」というアンケートを行ったが、その結果からだけでは、筆者が考えている問題点を十分に取り上げることができないし、十分に論じることができないと考えるからである。アンケートとその結果に焦点を当てた考察は、別の機会に行うこととする。

2. メガシティ・ジャカルタと「宗教と環境」調査とアンケート作成とその結果

まず、最初に2013年3月に行った「メガシティと『宗教と環境』(Megacity and “Religion and Environment”)」の質問項目を作成するまでの調査の過程を説明しておこう²⁴。このアンケートは筆者が所属している価値観調査班が行った広範囲な調査を念頭に、筆者が行った調査に基づいて質問項目を作成した。当初は、筆者の通常の調査方法は聞き取りや質問形式が多く、アンケート方法には必ずしも意義があるとは考えていなかった。しかし、様々な人にメガシティ・ジャカルタの問題点を聞くと、共有されている課題が多いということが明らかになってきた。そこで、宗教集団の属性、つまり宗教上の教義の相違から何らかの意見の相違があるのかどうかという点について調べてみたいと思い、アンケート調査をすることにした。それゆえ、アンケート形式の調査にはあまり意味を認めてこなかった筆者の従来の研究の立場からすると、極めて特殊な展開であるといえる。

2-1.

まず、アンケート作成以前の調査について概略を述べておきたい。

2010年からナフダトゥル・ウラマー(Nahdlatul Ulama, NU)のメンバー数名と継続的に会話を行ってきたが、筆者のジャカルタ調査はNUのメンバーの協力なくしてはなりたたなかった。初めに、NUでは評議員の一人であるA氏の知己を得た。A氏は建築家であり、メガシティの環境問題に関しても建築家として知見から問題点も数多く教えてもらった。A氏が指摘したメガシティとしてのジャカルタの問題点はどれもが重要であった。

その中でもここでは二三を挙げておきたい。一点目は、温暖化の影響による海面上昇のため、元々湿地帯であったジャカルタの地下に海水が浸水してきており、かなり内陸まで入り込んできているという。二点目は、一点目と関係しているが、海水が浸透してきたため、高層ビルの土台として地面に埋め込んだ鉄筋が塩分で腐食され始めているのではないかと、という懸念があるという。三点目は、ジャカルタにある高層ビル、ホテルやビジネスオフィスであるが、これらが許可なく地下水を汲み上げているため、地下水の枯渇と地盤沈下が起きてきているというものである。

A氏にはイスラーム寄宿学校（ベサントレン）に連れて行ってもらったり、NUの中での「気候変動と自然災害防止部」のメンバーを紹介してもらった。最初にイスラーム寄宿学校に連れて行ってもらった時は、なぜ、そこに連れて行ってもらったのかは理解できなかったが、後に分かったのは、NUはイスラーム寄宿学校と密接な関係を持っており、イスラーム的教義を子供に教える教育機関として重視している点である。筆者がイスラーム的教義と環境の問題といった点について質問したので、このテーマならばイスラーム寄宿学校の先生（キアイ）に会って、話を聞くのが一番良いと判断してくれてのことであった。また、「気候変動と自然災害防止部」のメンバーのBさんには主たる研究協力者として、筆者がジャカルタを訪問するたびに様々な便宜を図ってもらい、協力してもらっている。

同時に、国際イスラーム学者会議（The International Conference of Islamic Scholars）のメンバーの知己を得、継続的に会っては話をしてきた。特に、同会議のC氏にはジャカルタを訪問する際には必ず会い、筆者の調査の進展を報告するとともに、C氏の活動についても情報を共有している。2013年9月の調査では、C氏が教え始めた大学で、大学関係者と話し合いの機会を持った。また、C氏とともにその後の調査で重要な役割を果たしてくれるようになったのが、D氏である。D氏は、アンケート調査以降のチチャダスでの問題解決型の公共人類学的研究の要となってくれている²⁵。

他方、インドネシアでは少数派に入るが、キリスト教の環境活動も重要な位置を占めている。ムスリムが多数派の社会の中で少数派であるキリスト教徒がどのような立場にあるかも知ることができ、多数派であるNU関係者とは違う視点を知ることができた。そのようなキリスト教系の関係者の中で、カトリック教会の環境活動関係者について少し述べておきたい。

2012年3月、環境団体WALHIを訪問し、関係者と話をした後、帰る準備をしていた時、偶然、カトリック教会の環境活動家のEさんに出会い、数日後会う約束をした。そして、数時間話をしてもらった。同年、9月にはカトリック教会で数名の神父とカトリック系環境活動グループ「ペプリ（Pepulih）」との話し合いの場を持ってもらった。その際、2005年、SAGKI（インドネシア・カトリック教会大集会）で、環境意識の奨励と環境破壊防止のための活動を教会活動として行うことが決定された、ということを知った。主な対象はジャカルタ市内のゴミ問題とリサイクルであるという。その後、グリーン・イエズス会神父としていられているアル・アンダング・L・ビナワン神父（Al. Andang L. Binawang）と話し合う機会を持った²⁶。アンダング神父には、ジャカルタはメガシティであるが、その住民の生活様式は田舎の村人のそれだという見方を教えてもらい、メガシティ・ジャカルタの社会問題の一面を見る気がした。

さて、カトリック教会関係の環境グループ「ペプリ（Pepulih）」は、カトリック信者を

対象に活動を行っているのではなく、社会一般に対しての環境活動を行っている。それゆえ、活動の対象の多くはムスリム・ムスリマであることが多いが、その際には「カトリック」という面を出すことはない、という。つまり、宗教活動の一環として取られないようにする必要があるという。そのように振うようになったのは、かつてペプリの活動に協力したムスリムの人が、隣人からカトリックに関係している活動には協力すると言われていたことがあったからだという。

LIPI (インドネシア科学院) では、政治人類学者の F 教授、人口学の G 教授らとジャカルタ訪問時には定期的に会い、情報交換等を行っている。

これらのジャカルタ在住、あるいは仕事をしている人々からメガシティとしてのジャカルタの問題について質問をし、考えを聞かせてもらう中で次第に問題点が見えてきたといえる。これらの聞き取りや質問から分かってきたメガシティ・ジャカルタの問題を別の方法で確認することを目的として、アンケート調査をすることにした。以下、アンケート調査の過程を説明したい。

2-2.

メガシティとしてのジャカルタの問題を「宗教と環境」の観点からどのように見る必要があるか少し分かってきたので、質問項目を立て、ある程度の回収数を目指した。調査の主要な目的は宗教的背景の相違が都市問題、「宗教と環境」といったテーマに差異を生み出すのか、また、問題解決のために必要なことは何であると考えているのか等を明らかにすることであった。

アンケートの配布と収集に協力してくれたのは、NU では B さん、カトリック教会では E さんであった。E さんは環境活動家であり、今までにもアンケート調査をしたことがあり、インドネシア語の回答を英語に訳すのも手伝ってくれた。B さんは NU の多くのメンバーにアンケートを配布してくれて、その内容の吟味も手伝ってくれた。プロテスタント教会は、聖書同盟 (Scripture Union) の年一回の評議会集会の際に訪問し、そこでアンケート用紙を配布した。後日、その評議会に参加していた H 牧師の教会バタック・カロ・プロテスタント教会の礼拝時に訪問した時にもアンケートの配布を手伝ってくれた。メガシティ・ジャカルタの規模を考えると、今回のアンケートの対象の範囲は小さすぎほとんど意味をなさないと思えるが、それでも「宗教集団」を母体として調査をできたことは重要である。

最初にアンケートを回答してくれた層について述べておこう。まず、配布数、回収数が一番多かったのは主に NU の会員を対象としたアンケートである。相対的に社会層が広いと考えられた。カトリックは Kabayoran Baru 地区の Gereja Katoik St Yohanes Penginjil (聖ヨハネ・カトリック教会) の信者が主たる対象であったが、近隣のムスリムにも数名アンケートに答えてもらった。プロテスタントは全体の中で一番少なかったが、教会の指導者が集まる会合で最初のアンケートを行ったため、その意味では、教育レベル等が高い人々が集まっていたと考えられる。全部で回収できたアンケート数は 158 であった。配布したのは 200 程であったので、回収率はかなりの高率といえる。それは調査に協力してく

れた三名が直接手渡し、アンケートの回答を直接依頼してくれたからだと考えられる。

さて、ここで簡単に質問項目を紹介しておきたい。最初に性別、年齢、教育レベル、収入レベルを尋ねた。収入レベルは都市において生活をする際に自分はどのレベルに属していると考えているかを知るためである。次に、都市生活の満足度を調べるために、家族生活、経済生活、生活水準、教育、文化生活、娯楽、キャリア、自然、宗教生活、政治の項目について尋ねた。アンケートの目的が環境問題であるが、全てを聞くことはできなかったため、主要な都市の環境問題として挙げたのは、洪水、人口爆発、気候変動、海面上昇、食糧枯渇、水資源枯渇、地盤沈下、大気汚染、自動車である。

次に、個々人の知識レベルについて、宗教的教義、科学に関する知識、環境問題に関する知識、宗教による環境的価値についての質問項目を立てた。これに続いて、環境問題に関する宗教的教えについて十分知っているか、宗教的教義のための実践を行っているか、環境問題の解決のために実践をしているか、宗教的に動機づけられた環境に配慮した実践について、宗教のために用いる時間についてや自分自身を宗教的と考えるかどうかについて質問をした。

そして、メガシティの環境問題の解決に有効なのは以下のどれであるかを尋ねた。宗教上の教えと宗教上の教師の役割は重要か、宗教より科学の方が重要か、技術が環境問題を解決すると期待するか、政治的リーダーシップは重要かなどについてである。

最後に、メガシティ・ジャカルタの現状について自由記述をしてもらった。

ここでは、各項目全てについて取り上げることはできないので、幾つか本論と関連すると思われる項目について取り上げてみよう。

2-3.

まず、興味深かったのは、環境問題を解決するのに「科学」にはそれほど期待しない、「宗教」と「技術」には期待する、という回答が多かった点である。NU、カトリック教会、プロテスタント教会といった宗教集団に所属している人々に回答してもらったということもあるが、「宗教」的指導者が果たす役割は大きいと答えた点は重要である。環境問題との関連でムスリムに質問をすると、ほとんどの場合、クルアーンには環境保全にヒントとなる重要な教えがあると答える。それでは、世界最大のムスリム社会であるインドネシアの首都であるジャカルタの環境問題についてどう考えるかと尋ねると、様々な回答がある。政治的リーダーシップの欠如のせいである、汚職のせいである、焼却施設が不足しているためである等々の答えが返ってくる。しかし、ここで重要な役割を果たすと考えられている宗教的指導者として多くの人が挙げていたのはウラマーであり、イスラーム学校の教師「キアイ」である。特に子供への教育という観点から後者の役割は重要である。つまり、イスラームの教えを熟知しており、人々から尊敬されているキアイだが、この点はインドネシアのイスラームについて考える時重要なポイントであるといえる。NUは確かにベサントレンと強い結びつきを持っていることはよく知られている。

「信徒のイスラムへの忠誠は、これらの義務を遵守する正しい行い、イスラムの規範の遵守、そして信徒共同体への忠誠によって表現される。ジャワでは、イスラム教徒としての正しい行いについての模範を示すのはキアイであり、かれは金曜日の集団礼拝での説教、プサントレンでの教育などを通じ、イスラムの理想、教え、慣行を弟子やイスラム共同体の成員に伝える。ジャワ人ムスリムにとり、イスラムの規範の遵守とは、キアイの維持・継承するイスラム的伝統に従うことにほかならない。」²⁸

つまり、ムスリム・ムスリマにとってはキアイはイスラムの教義を考える上で重要な位置を占めていることは了解できる。だが、ここでのイスラムの規範が信仰上の規範のことを専ら指していること、メガシティの問題や環境問題に関しては、どこまでキアイが問題解決に向けての指針やイニシアティブを持つかは別の問題であると思われる。

さて、メガシティ・ジャカルタの現状とイスラムとの関係で次のような質問を度々した。イスラムは歴史的に美しい都市国家を建設したことで知られているのだから、なぜ、今日、インドネシアだけではなくカイロなど途上国のイスラム国の首都はそれほど清潔ではないのだろうか。この問いに対してはあまり明確な返答はない。ジャカルタは必ずしもイスラム都市として計画されたわけでもないし、建設されたわけでもないことは分かるが、なぜ、イスラムの見地から都市を奇麗に保とうという風にはならないのであろうか、という質問に対してのC氏の答えは示唆的である。それは「イスラムの教え」は知識として頭にはあるが、価値として、人々の生き方を導く指針とはなっていないからだ、という。このC氏の回答は、筆者が宗教的価値としてのイスラムの教えはメガシティ・ジャカルタを持続可能な都市に変えるのに役に立つであろうか、という質問を意識してのことかもしれないが、イスラム社会とされるインドネシアにおいて「イスラム」がどのような位置を占めているのか興味深いところである。

アンケートの結果で興味深い点として教育レベルの違いが挙げられる。既に述べたようにアンケートを答えてくれた人々の所属する社会階層ははっきりしていないところはあるが、宗教の属性がイスラムと答えた人の社会的階層は相対的に中間に集まっていた。プロテスタント教会は比較的教育レベルが高く、収入も相対的に高く、都市における生活にも相対的に満足している。カトリック教会は中間が多かったが、他の二集団に比べて収入がより低いと答えている人の数が若干あった。人口の大部分がイスラム教徒であるということを見ると、自らを下層に属すると考えるムスリムの数の方が多いと思われたが、おそらくNUに所属して活発に活動している人々は若干、中間層が多いのではないかと思われる。

ところで、メガシティの問題解決のためには政治的リーダーシップが必要であると答えた人が多かった。この点は意外であった。というのも、それまでインドネシアの社会問題として「腐敗」を取り上げる人が多く、政治には期待していない人が多いのではないかと思っていたからである。この「腐敗」の問題はかつては首都ジャカルタだけの問題であったが、2001年の地方分権化にともない権限が地方政府に委譲されるにつれ、「腐敗」が全国的な問題となったと、何人もの人が嘆いていた。この「腐敗」問題との関連では、2013年9月にNUの全国大会で、政府が「腐敗」を撲滅しなければ納税をボイコットするとい

う声明を出したことが注目に値する。つまり、インドネシア最大の保守的イスラーム団体とされる NU がこのような声明を出すほど、「腐敗」問題は深刻な社会・政治問題であると人々の間で認識されているということである。

このことから分かることは、環境問題は必ずしも常に人々の第一の課題とは認識はされていない、ということである。この点は重要である。というのも、研究者、活動家はサステナビリティ問題はグローバルな危急の課題であると思っているが、社会の中には環境問題よりも先に解決しなくてはならない問題が数多くあると考えている人がいる、という点を忘れることはできない。しかし、アンケートの結果からは、環境問題解決のために自分の生活の一部を犠牲にしても構わないと回答した人の数が多かった。それは「宗教と環境」についてのアンケートに答える中でそのように考えただけなのか、実際にもそのように行動しているのかは明らかにすることはできなかった。

3.

さて、今までに論じてきた内容をもう少し広い文脈で捉え直してみることにしたい。まず、アンケートでも用いた「宗教 (agama)」という概念が、本調査の主要概念であるが、極めて特異な意味合いを持っていることが分かったので、その点をまず取り上げてみたい。

インドネシアは主要な 5 島と小中規模の群島を含めた約 17,000 以上の島々から成り立つ多民族からなる共和国である。人口は約 2 億 3 千万人で、約 490 の異なる民族集団が居住している。インドネシアは世界最大のムスリム国として知られている。憲法上は信教の自由が承認はされているが、政府が公認しているのはイスラーム、プロテスタンティズム、カトリック、ヒンドゥー教、仏教と儒教の 6 宗教 (agama) だけである。この公認の宗教という概念が形成される歴史過程は福島 of 『『信仰』の誕生』に詳しく論じられているが²⁹、インドネシアという国家が統一国家として形成していく過程で規範としての宗教概念が形成されていったことが分かる。それから排除されていったクバティナンに代表される宗教習俗等が「信仰 (kepercayaan)」というインドネシア独特の範疇に組み込まれていった。そして、世俗社会インドネシアの建国 5 原則であるパンチャシラ (Pancasila) の中の「唯一神への信条 (Ketuhanan Yang Maha Esa)」に該当するものが宗教と認められるのである。インドネシア国民は上記公認された 6 宗教のいずれかを信奉しなくてはならないという義務を伴っている。

この論点は一見すると歴史的に考察すれば良い問題であるかのように思えるが、メガシティにおける「宗教と環境 (religion and environment)」というテーマを調査するに当たって、宗教という語が agama の意味で用いられざるを得ないということに起因する問題については十分に考慮しなくてはならないことに気付いたのは、アンケートをインドネシア語に訳してもらったのを見たときである。また、宗教という語が、あるニュアンスを伴った語であるということを確認したのは、台湾の仏教系の慈善団体「済慈基金会」を訪問したときである。研究者側が宗教学的な意味で「宗教」という概念を用いて調査をしようとしても、現地において受け止められる意味はパンチャシラにおける公的な意味合いであり、agama という意味におけるそれである。そこに意味論的な齟齬が生じてしまっているこ

とは、インドネシアの人々が agama という語の意味を政治的に認定された概念範疇であると認識していることに由来する。「宗教と環境」の調査というのは、そのような文脈で受け止められていたのである。

さて、そもそも「宗教と環境」というテーマで調査をするとしても、東南アジア最大のメガシティの都市環境、その都市における自然環境などは多くの点で筆者にとっては未知の領域である。同じく都市と呼んでも先進国の都市と途上国の都市とでは多くの点で異なっている。それゆえ、現地の人々の都市生活の経験や、ジャカルタに居住する人々の「自然」経験というものを共有できないところが多い。例えば、冷房の問題がある。ジャカルタには中間層、下層の人たちもおり、それらの人々はからなずしも冷房などを使っているわけではないが、新中間層の人たちは冷房を多用すると考えても良いであろう²⁹。例えば、全てのジャカルタで働く人、住民がそうしているわけではないであろうが、冷房を強くしたオフィスや部屋で厚い長そでのジャケットやユニフォームを着て過ごしているのを見聞きすると、単にエネルギーの無駄という以上に、これらの人々のメガシティにおける「自然」経験とは一体何であるのか、という疑問が湧く³⁰。熱帯気候の暑さの経験は、日本の自然環境の経験、穏やかで優しく繊細といった自然の経験とは全く異なる経験の質を伴っているのではないかと思われるが、地球環境問題を考える上で、どのように冷房を使用するのを控えるように勧めることができるのか難しい課題である。更に問わなくてはならないのは、元々熱帯地域のメガシティに住み、仕事をしている人々が、「冷房」を強くし、室内の温度をととも下げ（15度ぐらい）、厚いジャケットを着込んでいる身体経験は何を意味しているのだろうか、という問いかけである。

この問題について考察を加える際には、単に文化的身体の研究を行っているのではなく、メガシティの持続可能性についての研究の一環であるという点を忘れることはできない。次のエピソードは興味深い示唆を与えてくれる。

カトリックの環境活動家であり、調査助手をしてくれた E さんと話をしていた時のことである。気候変動の影響を受けている漁村の調査をしている E さんは、不必要なエネルギーを使わないように友人に話した時、その友人は冷房を強くしてセーターを着て何枚も毛布をかぶって寝るのに慣れてしまっているから、変えられないと答えたという。日本人の感覚からは理解できない点がある。しかし、ここでは何点が重要なポイントが明らかにされている。一点目は、習慣化された身体経験。二点目は、非自然化・人工化された温度調節空間の快適さ。三点目は、エネルギー使用の不可視性。四点目は、寝ている間の快適な睡眠。

これらの問題点は、些細なことのように思われるが、熱帯地域でのクーラーの使用に関する習慣についてであるので、ジャボダテペックの人口が2000万人を超えるとされている中、同じぐらいの数の人々が通年で毎夜冷房を利用するとしたら、どのぐらいのエネルギーの消費量になるのだろうか。つまり、この問題は単に個人の嗜好の問題としておくことはできない事柄であることが分かる。だが、問題は個々人の嗜好と倫理的判断がメガシティという都市の構造によって規定されてしまっており、しかも、個々人の意識がそのように形成されてしまっているということに本人が気づくことができない、という点である。

この問題は、筆者が話を聞いたほとんどの人が指摘するゴミ問題にも関係してくること

が分かる。ジャカルタを訪れて直ちに目につくのが通りや川に落ちているゴミの多さである。これらのゴミは、ジャカルタ市内で捨てられたものもあるし、川の上流から流されてきたものもある。特に、ボゴールのプンチャック峠から流れてくるチリウン川はジャカルタ市内を蛇行して、ジャカルタ湾に流れ込んでいるが、残念なことにチリウン川はインドネシアで最も汚染されている川という悪評が高くなっている³¹。ゴミの投げ捨て、放置の問題、そこに見られる習慣化された行為、メガシティの規模のために個人の選択が全体に与える影響が分からないなど、結果的にメガシティ全体の問題となってしまうことが分かる。特に、ゴミだけが唯一の原因ではないであろうが、毎年、ジャカルタを襲う洪水を引き起こしているのが川に堆積してしまったゴミであるという指摘もある。

さて、本研究の目的は、メガシティ・ジャカルタをサステイナブルな都市に変えるに当たって、宗教が如何なる役割を果たすことができるのか、というテーマを解明することにある。メガシティに住み、生活をする人々自身がメガシティと環境の問題を自らの課題としてどの程度認識できるのか、どのように実践することができるのか、という問題に関わってくると思われる。では、その問題はどのように受け止められているのであろうか。ウェブ上に見られる以下のように叙述は、ジャカルタの現状についての共通の見解であろうと言ってもよいと思われる。

「(ジャカルタ)市は、ますます、爆発的な人口成長、終わりの見えない交通渋滞、汚染された空気と水、未開発のスペースの減少、都市貧困、洪水による被害などで知られるようになってきている。交通渋滞は2014年にはもはやどうしようもないレベルに達し、大気汚染はほぼ毎日健康被害を及ぼすレベルである。都市人口の4分の1はカンボンと呼ばれるスラム地域に住んでおり、このカンボンは都市全体に広まっている。これらの貧困地域は都市化の過程で呑み込まれてしまったかつての村落地域でもある。公共交通網の周辺や河川敷きに不法に滞在している貧困層は都市の人口の5パーセントにも上る。ジャカルタの持続不可能な状況は壊滅的な状況である。」³²

ジャカルタ内の自然環境の持続可能性は、ほとんどもはや問題にもなっていないかのように思われる。そこにはそれ自身で再生可能な自然環境はほとんど残っていない。ここで問題とされているのは、社会の持続可能性であり、それすらも危機的であるといえる。ジェフ・ターナが論じているように³³、ジャカルタの持続可能性の問題は社会の持続可能性の問題であり、特に都市としての交通網が重大問題であるというのである。それゆえ、交通網をどのように再構築するかが重大な課題の一つであるという。では、メガシティ・ジャカルタ自身のサステナビリティとは一体何なのであろうか。他の多くのメガシティと同様に、その圏内には自然環境、あるいは自然資源がほとんどなく、経済活動のためには圏外の自然環境、自然資源を利用しなくてはならないならば、メガシティ圏内だけの社会インフラのサステナビリティだけを取り上げては十分ではないであろう。だが、メガシティの規模と複雑さは、それらを全体的・総合的に見る視点を持つことを困難にさせている。

1990年国連大学が行ったメガシティ会議でシドニー・ゴールドシュタインは、規模、

金融、経済構造（産業と商業）、政治の役割、教育施設、科学者、サービス部門、世界システムの中での位置付けなどの諸要素を考慮する包括的な基準をもって「メガシティ」とは何かを考えなくてはならないと論じている³⁴。当時から既に20年以上経っているが、メガシティの特性を考える上での基本的な視点は、その複雑を指摘しているという点で今日でも重要である。しかし、直ちに注意を引くのは、この時点では、「宗教」という要素がメガシティを構成する重要な要素であると必ずしも認識はされていないということである。宗教が主要な構成要素の一つであるにもかかわらず問題とは認識されていない、といってもよい。

実際、現在のメガシティとしてのジャカルタの問題は「宗教」に起因する問題はあまりないと言っても良いかもしれない。政治的な問題を引き起こす背景として宗教上の見解の相違が挙げられることがあるが、NUのように宗教的寛容を推し進めている立場からすると、メガシティに引き寄せられてくる多様な人々の中の衝突、対立を緩和し、共生できるようにすることも、民主化された宗教伝統の責務であるということもできる。そうであるならば、ジャワの伝統を守ろうとする保守的なイスラーム信者たちは、地球環境問題という新しいグローバルな課題にも対応する新しい市民として登場しているのかもしれない。そのような人々がメガシティ・ジャカルタのサステナビリティの課題を解決する方策を提示してくれることを期待したい。

結び

本論では、筆者がインドネシア共和国の首都ジャカルタで行っている「宗教と環境」の研究を、Autoethnography 的な報告として一部説明した。人文学分野の研究者が、具体的な問題解決に寄与できるとは考えられないが、しかしながら、それに関連した考察を行うことは許されるであろう。本論でその背景を説明したアンケートの詳細な分析は別の機会に行うつもりである。

注

¹ 本論で意味するサステナビリティは、ブルントランド委員会の『我ら共有の未来 (Our Common Future)』(1987年)に見られるサステナブル・デベロップメント(持続可能な開発)の概念を出発点として、その後、様々な展開がなされた諸概念と基本的には同じである。但し、企業の販売戦略として用いるだけのサステナビリティや企業の存続だけを考えている持続可能な開発概念とは相容れない立場である。

² Leslie Paul Thiele, *Sustainability* (Cambridge: Polity Press, 2013): 45.

³ William M. Sullivan and Will Kymlicka, *The Globalization of Ethics* (Cambridge: Cambridge University Press, 2007).

⁴ Carolyn Ellis, Tony E. Adams & Arthur P. Bochner, "Autoethnography: An Overview," *Forum Qualitative Sozialforschung/Forum: Qualitative Social Research*, Vol 12, No 1 (2010), Art10, <http://nbn-resolving.de/urn:nbn:de:um:0114-fqs1101108>.

⁵ Clifford Geertz, *The Religion of Java* (Chicago and London: The University of Chicago Press, 1960).

⁶ 福島真人、『ジャワの宗教と社会：スハルト体制下インドネシアの民族誌的メモワール』、ひつじ書房、

2002年。

⁷ Andrew Beatty, *Varieties of Javanese Religion: An Anthropological Account* (Cambridge: Cambridge University Press, 1999).

⁸ ベネディクト・アンダーソン、白石隆、白石さや訳、『定本想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』、書籍工房早山、2007年。

⁹ 土屋健治、『インドネシア思想の系譜』、勁草書房、1994年。

¹⁰ タウフィック・アブドゥラール編、白石さや・白石隆訳、『インドネシアのイスラム』、めこん、1985年。

¹¹ Nakamura, Mitsuo, *The Crescent Arises over the Banyan Tree: A Study of the Muhammadiyah Movement in a Central Javanese Town*. (Singapore: Institute of Southeast Asia Studies, 2014) Amazon Kindle版。

¹² 笹岡正俊、『資源保全の環境人類学：インドネシア山村の野生動物利用・管理の民族誌』、コモンズ、2012年。

¹³ 井上真、『コモンズ思想をもとめて—カリマンタンの森で考える』、岩波書店、2004年。

¹⁴ 倉沢愛子、『ジャカルタ路地裏フィールドノート』、中央公論新社、2001年。

¹⁵ 吉原直樹編著、『アジア・メガシティと地域コミュニティの動態—ジャカルタのRT/RWを中心として』、お茶の水書房、2005年。

¹⁶ 斎藤綾美、『インドネシアの地域保健活動と「開発の時代」：カンボンの女性に関するフィールドワーク』、お茶の水書房、2009年。

¹⁷ 新井健一郎、『首都をつくる：ジャカルタ創造の50年』、東海大学出版会、2012年。

¹⁸ 倉沢愛子編著、『消費するインドネシア』、慶応義塾大学出版会、2013年。

¹⁹ Robert W. Hefner, *Civil Islam: Muslim and Democratization in Indonesia* (Princeton and Oxford: Princeton University Press, 2000).

²⁰ Verena Beitzinger-Lee, *(Un)Civil Society and Political Change in Indonesia: A contested arena* (London and New York: Routledge, 2009).

²¹ 年に二回ほど、それぞれ一週間か二週間調査で滞在したというだけでは、実地調査をしたというには不十分であることは十分承知である。

²² Carolyn Ellis, 前掲書。

²³ Epiphany は宗教的には神々、神格が自らを啓示することを指し示すが、ここでは物事の本質が露呈される経験を示している。

²⁴ このアンケートの全体は巻末に掲載しておいた。

²⁵ チチャダスはボゴール近郊の小さな村であるが、ジャカルタとボゴールの間に位置するため、多くのグローバル企業の工場が立ち並んでいる。環境汚染の問題等が指摘されているが、会社ならびに工場関係者は地元住民との話し合いには否定的である。そこで、地元住民と企業、地元政治との連携を築き上げ、会社・工場が地元住民の声に配慮するように仕向けるためのネットワーク作りに手を付けた。この研究プロジェクトをインドネシア大学人類学部 Yunita 教授に説明したところ、それは公共人類学の課題ですね、と指摘された。筆者にはそのようなつもりはなかったが、人類学者からはそのように聞こえたということである。ここでもまた、自身の意図とは違う文脈で自分の意図が再解釈される、再構築されるという経験をした。

²⁶ AL Andang L. Binawan, “Kicking Habit: Restoring City, Recreating Faith, Hope and Love.” 筆者に送られてきた著者の原稿による。

²⁷ 「第三部 プラントレン伝統—ジャワのキアイとイスラム伝統主義 『第一章 プラントレン—概観』」、タウフィック・アブドゥラール編、前掲書。

²⁸ 福島真人、『「信仰」の誕生—インドネシアにおけるマイナー宗教の闘争』、『ジャワの宗教と社会：スハルト体制下インドネシアの民族誌的メモワール』、ひつじ書房、2002年、pp. 326-396。

²⁹ ここでは、倉沢が述べている新中間層の見方を採用する。「ところが開発政策の進展とともに、特に

1980年代以降は、民間セクターが急速に拡大し、ここに身を置く民間大企業のサラリーマン、ならびに彼らの仕事や生活を支える弁護士、会計士、ジャーナリストらの専門職が多数登場してくるようになった。これを従来の中間層と区別して『新中間層』と呼ぶのであり、本書では主たる関心の対象とするのはこの新興の『新中間層』である。とはいえ、本書が扱うさまざまな消費行動の主体には、当然従来からの『中間層』も含まれている。とりわけ、階層間の比較を行う場合、つまり他の階層との対比を意識して語る場合には、総合的に『中間層』と表現している。」倉沢愛子編著、『消費するインドネシア』、慶應義塾大学出版会、2013年、2頁。

³⁰ ジャカルタのオフィスや住居で実際、冷房による温度設定が何度で、ジャケットや衣服の厚さについて調査をしたわけではない。しかし、ジャカルタで話を聞いた多くの人が、この点について述べていた。

³¹ 大西、小野、Lubis、斉藤、Bakti、Delinom、清水、「巨大都市ジャカルタのチリウン川における水質汚濁特性」、『日本水文科学会誌』、第43巻、第2号（2014）、39-46。この調査によれば、季節ごとの自然浄化作用もあることが指摘されている。

³² David, "Toward a More Sustainable Jakarta," The City Fix, EMBARQ, November 7, 2009, (<http://thecityfix.com/blog/towards-a-more-sustainable-jakarta/>), accessed on January 12, 2013.

³³ Jeff Turner, "Urban Mass Transit and Social Sustainability in Jakarta, Indonesia," Case study prepared for Global Report on Human Settlements 2013. UN-HABITAT. (<http://www.unhabitat.org/grhs/2013>), accessed on January 12, 2013.

³⁴ Sidney Goldsterin, "Demographic issues and date needs for mega-city research," Roland J. Fuchs, *Mega-city Growth and the Future*, (Tokyo: The United Nations University), 1994 : 32-61.

参考

「メガシティ・ジャカルタにおける『宗教と環境』
に関するアンケートとその集計結果」

Questionnaire

(This questionnaire is designed to ask people what they think about life and natural environment of Jakarta, a typical Megacity in developing countries. I am conducting this study as a part of a research project at the Research Institute of Humanities and Nature in Kyoto, Japan, the title of which is "Megacities and Global Environment", and its purpose is to attempt to figure out how to design sustainable megacity. I will use the collected information solely and only for the purpose of the above-mentioned research project. I am very thankful to you for your kindness and cooperation in answering the following questions. Please mark whatever you think suits you.)

1. Tentang Anda (about yourself)

Kelompok Umur Anda (Your age group)	10-an tahun	20-an tahun	30-an tahun	40-an tahun	50-an tahun	60-an tahun	70-an tahun	80-an tahun
Jenis Kelamin (Your gender)	Laki-laki (male)						Perempuan (female)	
Pendidikan Anda (Your highest education)	SMP (Junior)	SMU (High School)	Universitas (University)	Pasca-sarjana (Graduate School)				
Agama Anda (Your religious affiliation)	Islam	Protes tant	Catho lic	Hindu ism	Buddh ism	Confucian (Konfuchu)	Lainnya (others)	
Penghasilan Anda (Your income)	Di bawah rata-rata (below average)		Rata-rata (average)		Di atas rata-rata (higher than average)			

2. Bagaimana Anda menilai kehidupan Anda di Jakarta menurut poin-poin di bawah ini?

(How do you evaluate your life in Jakarta regarding the following points?)

	buruk (bad)	cukup (not so good)	baik (good)	baik sekali (very good)	sangat baik (highly good)
Mengenai kehidupan keluarga (Regarding family life)					
Mengenai kehidupan ekonomi (Regarding economic life)					
Mengenai standar hidup (Regarding living standard)					
Mengenai pendidikan (Regarding education)					
Mengenai hidup kebudayaan (Regarding cultural life)					
Mengenai hiburan (Regarding entertainment)					
Mengenai pengembangan karir Anda (Regarding developing your career)					
Mengenai menikmati alam (Regarding enjoying nature)					
Mengenai menjalankan kehidupan agama Anda (Regarding leading your religious life)					
Mengenai politik (Regarding politics)					

5. Bagaimana Anda menilai praktik/aksi nyata Anda yang berkaitan dengan ajaran agama dan permasalahan lingkungan hidup? (*How do you evaluate your practice regarding religious teaching and environmental issues?*)

	Kurang (<i>minimum</i>)	Seadanya (<i>basic</i>)	Cukup (<i>modest</i>)	Baik (<i>good</i>)	Baik sekali (<i>very good</i>)
Praktik untuk ajaran agama Anda (<i>Your practice for religious teaching</i>)					
Praktik untuk masalah lingkungan hidup (<i>Your practice for environmental issues</i>)					
Praktik untuk masalah lingkungan hidup yang termotivasi ajaran agama atau apakah Anda sadar akan ajaran-ajaran agama yang berkaitan dengan lingkungan hidup ketika Anda mempraktikkannya? (<i>Your religiously motivated environmental practice, or are you aware of religious teachings related to certain environmental issues when you practice?</i>)					
Seberapa banyak Anda mengabdikan waktu untuk mempraktikkan agama? (<i>How much do you allocate your time to religious practice</i>)					
Sejauh mana Anda menilai diri Anda sebagai insan religious? (<i>How much do you think about yourself being religious</i>)	Kurang (<i>minimum</i>)	Seadanya (<i>basic</i>)	Lumayan (<i>fairly</i>)	Baik (<i>good</i>)	Baik sekali (<i>very good</i>)

3. Menurut Anda, seberapa besar masalah-masalah lingkungan hidup di bawah ini berpengaruh serius pada masa depan Jakarta? (*Do you think if any of following environmental issues is seriously effective for the future of Jakarta?*)

	1	2	3	4	5	6	7
1. Banjir (<i>Flooding</i>)							
2. Pertumbuhan penduduk (<i>Population growth</i>)							
3. Perubahan Iklim (<i>Climate Change</i>)							
4. Naiknya permukaan air laut (<i>Sea Level Rising</i>)							
5. Kerawanan Pangan (<i>Food Scarcity</i>)							
6. Kekurangan Air (<i>Water Shortage</i>)							
7. Menurunnya tanah (<i>Land sinking subsidence</i>)							
8. Pencemaran Udara (<i>Air Pollution</i>)							
9. Jumlah Kendaraan Bermotor (<i>Number of Automobile</i>)							

4. Bagaimana Anda menilai pengetahuan Anda tentang ajaran agama, ilmu pengetahuan dan permasalahan lingkungan hidup? (*How do you evaluate your knowledge of religious teaching, science and environmental issues?*)

	Kurang (<i>minimum</i>)	Seadanya (<i>basic</i>)	Cukup (<i>modest</i>)	Baik (<i>good</i>)	Baik sekali (<i>very good</i>)
Pengetahuan Anda tentang ajaran-ajaran dasar agama Anda (<i>Your knowledge of basic religious teachings</i>)					
Pengetahuan Anda tentang ilmu pengetahuan (<i>Your knowledge of science</i>)					
Pengetahuan Anda tentang permasalahan lingkungan hidup (<i>Your knowledge of environmental issues</i>)					
Pengetahuan Anda tentang ajaran agama yang berkaitan dengan nilai-nilai lingkungan hidup (<i>Your knowledge of religious teachings on environmental values</i>)					

6. Dalam hal menyediakan solusi bagi permasalahan lingkungan hidup dan kota besar (As to providing solutions to environmental issues and Megacity):

	Tidak (No)	Tidak begitu banyak (Not so much)	Ya (Yes)
Apakah Anda menemukan ajaran-ajaran yang berharga dari agama Anda? (Do you find any valuable teachings from your religious affiliation)			
Apakah menurut Anda para guru agama sangat berperan? (Do you think that religious teachers are very instrumental?)			
Apakah menurut Anda ilmu pengetahuan lebih penting dari pada ajaran agama? (Do you think that science is more important than religious teaching?)			
Apakah menurut Anda teknologi dapat mengatasi permasalahan lingkungan hidup? (Do you think that technology will be able to solve environmental problems?)			
Apakah menurut Anda kepemimpinan politik sangat penting? (Do you think that political leadership is very important?)			

7. Dalam persentasi, kira-kira berapa nilai masing-masing elemen di bawah ini dalam hidup Anda di Jakarta (sehingga jumlahnya 100%)

Keluarga	Ekonomi	Politik	Pendidikan	Agama	Hiburan	Kesehatan
() () () () () () () ()	() () () () () () () ()	() () () () () () () ()	() () () () () () () ()	() () () () () () () ()	() () () () () () () ()	() () () () () () () ()

(Suppose that various elements of your life in Jakarta make 100 percent. For example, Economic Politics Education Religion Entertainment Health Family
10 10 30 30 5 5 10
(10+10+30+30+5+5+10=100).)

Please provide appropriate number for each item concerning your life by making 100.
Economics Politics Education Religion Entertainment Health Family

() () () () () () () () () ()

8.a. Bagaimana Anda menilai keseimbangan antara kehidupan pribadi dan kehidupan sosial Anda di Jakarta? Lingkari jawaban Anda (How do you evaluate the balance between your personal and social life in Jakarta?)

Lebih penting (ke kiri) Lebih penting (ke kanan)
(More important ← → More important)

Kehidupan Pribadi/Individual	1	2	3	4	5	6	7
Sosial/Komunal							
(Personal/Individual life							
Social/Communal life)							

8.b. Seberapa sering Anda bersosialisasi dengan para tetangga terdekat Anda? Lingkari jawaban Anda. (How often do you socialize with your immediate neighbors?)

Harian (Daily) Kadang-kadang (Sometimes) Tiap minggu (every weekend) Tidak pernah (non)

9.a. Apakah Anda keberatan untuk mengorbankan kehidupan pribadi Anda seperti ekonomi, hiburan, atau lainnya demi melindungi alamdan lingkungan hidup di Jakarta? (Do you mind sacrificing any of your personal life such as economics, entertainment and others for the sake of protecting nature in Jakarta?)

9.b. Jika ya, apa alasan utama Anda? Jelaskan (If so, what is your primary reason?)

10. Mohon tuliskan apapun pendapat Anda tentang masa depan Jakarta sebagai suatu kota besar/Megacity. (Please write anything which you think about future of Jakarta as a Megacity.)

Terima kasih banyak atas kerjasama Anda. (Thank you very much for your kind cooperation).

A Reflection on a Study of “Religion and Environment” in Jakarta

Takeshi Kimura

Often a questionnaire is regarded as an objective method to find several features regarding a research topic. Yet, in reflecting a process of designing and constructing a set of questionnaire regarding other society, it is noticeable that a researcher needs to be acculturated into a foreign culture and society first. This process of acculturation could be analyzed in an autoethnographical manner. By doing so, problematic aspects of questionnaire are also explored.

In this paper, I examine a background process of designing and constructing my own questionnaire on religion and environment in Jakarta by reviewing my own encounter and conversation with Indonesian people, and discuss problematic issues regarding the questionnaire itself which I did not notice in its making-process.